

一途な男爵令嬢

浮気王子には

押し倒される

— 成人向け —  
**R18**  
ADULT ONLY  
18歳未満  
購入・閲覧禁止

Mina Natsumori

## 目次

一途な男爵令嬢は浮気王子に押し倒される.....	3
I 久しぶりの手紙.....	3
II 短いティータイム.....	10
III 連れていかれた先は.....	22
IV 気分転換になるなら.....	29
V ほんの戯れ.....	39



一途な男爵令嬢は  
浮気王子に押し倒される

— 本編 —



一途な男爵令嬢は浮気王子に押し倒される

## I 久しぶりの手紙

「お嬢様、王太子殿下からお手紙が届いております」

「そう……ありがとう」

メイドの持ってきた封筒に手を伸ばした。手紙の送り主は私の婚約者、王太子のイザーク様だ。

(長らく何の音沙汰もなかったというのに……やはりあの件かしら)

肺にどんよりと溜まった空気を吐き出さないように、何事もない顔で封を切る。便箋には見慣れた文字で「大事な話があるので登城するように。日時は君に任せる」と書かれていた。

「すぐにお返事をお出しになりますか？」

「……ええ。今書くわね」

私はそのままペンをとり、「明日以降であれば、いつでもお呼びください」と書い

て、メイドに渡した。

「久しぶりに殿下からお手紙が届いてようございましたね」

「……そうね。お会いできるのが楽しみだわ」

内容を知らないメイドは、以前のようにイザーク様がお招きくださったのだと思ったようで、嬉しそうにしている。悪気のない彼女に心配をかけることはない、努めて笑顔で送り出した。

ひとりになった部屋でソファーに腰かけると、気分が重たいせいなのか、体がいつもより深く沈み込むように思えた。

（大事な話がある……か……）

イザーク様の手紙に書かれていた『大事な話』というのが何なのか、私には大いに心当たりがあった。ここしばらく、社交界で囁かれている、イザーク様に関する噂だ。

カベロ公爵家のアマリア公女、キンバリー侯爵家のリネット嬢、そしてオルタ伯爵家のクラリス嬢。ここ一カ月ほど、イザーク様が彼女たちを頻繁に王城に招いてい

るといふ。その状況から、三人の令嬢を王室に迎えるつもりなのではないかという憶測がなされているのだ。

そのようなことを公然と話してはイザーク様に対して不敬にあたるだけに、あくまでもひっそりと話題にされている。けれど、婚約者である私が茶会に参加すれば、真相をたずねられてしまうことは避けられなかった。

私が正直に「王太子殿下と何のやり取りもしていないので知らないのです」と答えると、たずねてきた相手は皆、気の毒そうな顔をした。おそらく皆も同じことを考えている。イザーク様が私を見捨て、他の女性を伴侶にとお考えなのだと。

相手に事欠かないはずのイザーク様が、取り立てるような家柄ではない自分に、自ら婚約を願ひ出してくれたことが思い出された。それは一国民として非常に光栄なことであると共に、イザーク様のことを慕っていた私にとって、本当に夢のような瞬間だった。

婚約してから何年か、幸せな日々が続いた。

すでに公務で忙しくなさっていたイザーク様にお会いできる時間は少なかったけれ

ど、時折手紙を貰って登城しては、王宮の庭園と一緒に歩き、舞踏会があればエスコートしてもらい、ダンスを踊った。確かにあの頃は、イザーク様からの愛情を感じていた。自分には身に余る幸せだと思っただけに。

(けれどイザーク様のお心は……移ろってしまったのね)

正確には思い出せないけれど、恐らくは自分の成人が近くなった頃からだった。イザーク様の態度が、急によそよそしくなったのは。

それまで月に何度か貰っていた手紙は一通も届かなくなり、たまに手紙が来ても、それは婚約者として参加しなければならぬ行事に関する、ごく事務的な内容。舞踏会に参加しても、以前はエスコートの際に腕を差し出してくださっていたのに、手を差し出すようになられた。まるで私と距離を取りたいと言われているようで、その度に胸がチクリと痛んだ。

そのうち、一緒に踊っていただけのことも少なくなり、先月ご一緒した舞踏会ではダンスの途中で急に帰ってしまわれた。

(何か、私に良くないところがあったのかしら……)

そう考えると、良くないところだらけ。

むしろ良いところなどひとつも見当たらない。

対して、イザーク様とお噂のある三人のご令嬢たちは、家柄の良いお方ばかり。どなたも昔から私と仲良くしてくださっていて、人柄が良いことも十二分にわかっている。皆様それぞれが、王太子妃に相応しいご令嬢だと、自信をもっておすすめできるほどに。

イザーク様の『大事な話』というのはきくと、私との婚約破棄。

三人のご令嬢の中から新たな婚約者を選びたいけれど、そのためにはまず、私との婚約を解消しなければならぬ。きっとイザーク様は私に不満があり、前々から新しいお相手を探しておられたのね。だから急によそよしくなって、交流も途絶えた。

その考えを裏付けているのは、ご令嬢たちとの噂についてたずねられたイザーク様が「その通りだ」とおっしゃって、何の否定もなさらなかったという話。それを人づてに聞いた時から、近いうちにイザーク様から婚約解消の申し入れがあるだろうと予想していた。



(手紙に直接書いてくださればお手間にならなかったのに……)

おそらく内容が内容なので、直接会って話さなければならぬとイザーク様が配慮してくださったのだ。けれど、出来ることなら顔を合わさずに済ませたかった。イザーク様から面と向かって婚約破棄を告げられたら私はきつと、その場で泣き崩れてしまうもの。

イザーク様に手紙を返した晩。

私の元には早くも返事が届いた。開けてみると「いつでも良いなら早いうちがよい。明日の午後、王子宮を訪ねるように」とあった。イザーク様がお住まいになっている宮だ。

これまでお会いする時は決まって、執務室のある中央宮を訪ねるよう言われていたことを考えると、やはり他の者に聞かれては困る、個人的なお話をなさるつもりなのだと察せられた。早いうちがよいという言葉にも、一刻も早く婚約を解消したいという強い意思が読み取れる。

明日にはイザーク様から別れを告げられてしまう。

目を閉じるとそればかり考えてしまい、私の元にはいつまでも眠気が訪れなかった。

## II 短いティータイム

「お嬢様。本日は少し顔色が悪うございますね……？」

「そう？ 楽しみでなかなか寝つけなかったからかしら」

「そうでございましたか！ ではいつもより明るい頬紅にいたしましょう」

「ありがとう」

午後の登城に向けてメイドたちが身支度を整えてくれる姿を、私はぼんやりとした頭で鏡越しに眺めていた。久々にイザーク様に呼ばれたものだから、皆が張り切っている。帰ってきた私の口から婚約を解消されたと知らされれば、これまでイザーク様との仲を応援してくれていた彼女たちを、さぞがっかりさせてしまうと思う。本当は今すぐにもベッドに戻りたい気分だけれど、気乗りしない様を少しでも見せてしまえば余計な心配をかけてしまう。せめて送り出してもらうまでは笑顔でいよう。馬車で一人になってしまえば、いくらでも嘆くことができるのだから。

早めの昼食が喉を通らないまま、馬車に乗って王宮へと向かった。

窓から馬車の外を眺めると、何度も往復した景色に今までのことが思い出される。

イザーク様に招かれて庭園を散歩した時、初めて手を繋いだ。私の顔が真っ赤になって、心配されてしまったのを今でも覚えている。あまりにも恥ずかしがる私に連れて、イザーク様の頬まで赤くなってしまったことも。

護衛の騎士に見られると恥ずかしいからと、舞踏会をこっそり抜け出し、誰にも見つかからないよう中庭で口づけを交わしたことだって、鮮明に思い出せる。つい昨日のことのように。

(……まだ泣いてはいけないわ)

メイドたちが腕によりをかけて支度してくれたものを、ここで涙を流しては台無しにしてしまう。イザーク様から破談を言い渡されても、笑顔でお別れしましょう。そうすればイザーク様のお心も傷まない。泣くのは帰りの馬車に乗ってから。そして家に着いたら彼女たちに真相を告白して、今まで応援してくれたことに感謝する。もしかすると、自分のことのように泣いてしまう子がいるかもしれない。そうしたら私の方がなぐさめ役にならないと。

そう考えることで少し気分が軽くなり、王城に馬車が着く頃には涙でぼやけていた視界も晴れていた。

馬車を降りて王子宮へと続く廊下を歩く。柱の間から陽の光が燦々と差し足元を照らして、いかにも散歩日和といった心地よい天気。

少し立ち止まって外に目をやると、庭園の草木が輝いて見える。美しい風景だけれど、私がイザーク様と共に足を踏み入れる機会は、もう二度とやって来ない。

(せめて曇っていればよかったのに)

いっそ雨でも降っていれば、庭園を見ただけでここまで落ち込みはしなかったかしら。鉛のように重たくなった足を前に進め、王子宮の入り口に立っていた騎士に声をかけた。イザーク様の護衛騎士のひとり、ベイリー卿だ。

「ごきげんよう。王太子殿下より宮を訪ねるようにとのことです。参りました」

「お待ちしておりました。ご案内いたします」

ベイリー卿に案内され、王子宮の中をしばらく歩いた。規律が完璧に守られた侍従たちの厳粛な振る舞いに、歩くだけでも緊張してしまう。

「レノン男爵令嬢。殿下にお声がけしますので、こちらでしばらくお待ち下さい」

「かしこまりました」

歩いていた中でも一際目を引く扉の前でベイリー卿が立ち止まり、私は扉をまじまじと眺めた。

（立派な扉……ここが応接室なのかしら？）

ベイリー卿が扉をノックして部屋の中に声をかけると、イザーク様のお声が返ってきた。久々に聞く声に胸が高鳴ったけれど、今から部屋の中で切り出される話の内容を考えると、浮かび上がった気持ちも一瞬にして沈んでしまう。笑顔でお別れしようなどと思っていたけれど、甘い考えだったのかもしれない。

「どうぞお入りください」

「ありがとうございます」

気を取り直す暇もなく、私は笑顔で送り出してくれるベイリー卿に頭を下げ、部屋の中に入った。

「王太子殿下。フェリシア・レノンがご挨拶申し上げます」

久々にお会いしたイザーク様は、いつも髪留めでひとつにまとめておられる襟足をそのままおろし、ゆったりとした服をお召しになっていた。詰襟でかつちりとした服を着ておられるところしか見たことがなかったので、なんだか新鮮だ。

イザーク様は私の挨拶に無言で頷くと、向かい側のソファーにかけるよう手で促した。席に着きながら、つつい部屋を観察してしまう。

(ここは……応接室ではないのかしら?)

広い部屋の中にはソファーとテーブル。その奥には本棚と机がある。一見書齋のように見えるけれど、右の方にベッドが置いてあるところを見ると、寢室を兼ねた個人の部屋に思える。

まあどのような部屋で会うかはさして重要ではない。きっと応接室が空いていなかったのだろうと思いつつ、侍従がお茶を淹れる姿を眺めた。

「君たちも出ていくように。何かあれば呼ぶ。それまでは誰も入らぬようにと、護衛にも伝えてくれ」

お茶の準備を終えて傍で控えようとしていた侍従たちにイザーク様が声をかける

と、皆が頭を下げて部屋を出ていった。

(人払いなされたのね……)

王族の婚約破棄となると、公表する内容やタイミングに注意を払わなければ、民の不安を煽りかねない。侍従や護衛の耳に先んじて情報が入ってしまわないように留意されていることだろうけれど、早速ふたりきりになってしまった私は気が気でない。

いよいよ話が始まるのだと身構えていると、イザーク様がゆっくりと口を開いた。

「……久しいね、フェリシア」

「はい、殿下。お目にかかれて光栄でございます」

「どうした？ そのように堅苦しくして……」

「いえ。無礼があつてはいけませんので」

「……なぜ今更、そんなことを気にする？」

(なぜって……婚約を解消するからでは？)

婚約者だったので親しい態度を許されていたけれど、これからはそうはいかない。

それとも、今はまだ以前のように振舞っても構わないとおっしゃりたいのかしら。



問いかけにお答えできないでいると、イザーク様がお茶を召し上がりはじめた。

「久々に会ったんだ。まずは茶を楽しもう」

「……そうでございますね。いただきます」

イザーク様に促され、私もティーカップを手に取る。ひと口飲んで、とても喉が渇いていることに気づいた。すぐさま婚約破棄を言い渡されると思っていたのに、きつとイザーク様は先にお茶を飲んでからの方が落ち着いて話せるだろうと配慮してくださったんだわ。

これから破談を言い渡す相手に対しても気遣いを欠かさないイザーク様の姿にほっとするも、穏やかな気持ちでいられたのはほんの束の間のこと。

ふたりきりの部屋、互いに何も喋らず、ティーカップとソーサーがかすかに立てるカチャリという音が響くだけ。その状況に、私は徐々に気まずさを感じはじめた。

互いに一杯目のお茶を飲み終えても、イザーク様が口を開く様子はない。

「殿下、お茶のおかわりをお淹れいたしましょうか？」

「……いや、いい」

「さようでございますか……」

あまりの気まずさでお茶を淹れようとするも、すっぱりと断られてしまった。よく考えたら、婚約を破棄する相手に淹れられたお茶なんて、飲みたいわけがない。

つい今までのように振舞ってしまったことにうつむいていると、イザーク様が突然喋りはじめた。

「今日は天気がいいね」

「……そうでございますね。気持ちの良い天気でございます」

「ああ。庭園を歩くのにぴったりだ」

「そうでございますね。後で散策なされては？ 体に良うございますから」

うつむいたままで答えると、部屋の中はまたしても沈黙に包まれた。

その後も時折、イザーク様がお話になるも会話が続かない。しかも話題は当たり障りのない世間話ばかり。イザーク様がいつまで経っても本題に入らない様子に、私は内心首を傾げていた。

なぜ殿下は婚約破棄の件を切り出さないの？ お茶も飲み終わったわけだし、そろ

そろ本題に入ってもいいはず。何か切り出しづらいご理由でもあるのかしら。

沈黙が続いているのをいいことに考えていると、ふと思いついた。イザーク様から申し込んだ婚約を、他の者と婚約したくなったという理由で解消することになり、良心を傷めておられるのかもしれない。

(私の気持ちなど気にせず、率直に言ってくださればいいものを)

いいえ、それは難しいわよね。イザーク様は気遣いに溢れる優しいお方。だからこそ私も、ずっとお慕いしていたのだから。

時計にちらりと目をやると、本題に入れないまま三十分ほど経っている。いつもイザーク様の執務室でお会いする時は、ご公務の合間を縫って一時間ほどしか一緒に過ごさない。つまり、残すところ三十分。

けれど今のご様子、イザーク様がご自分から破談について言及なさるとはとも思えない。お忙しいだろうに、婚約を解消する相手にこれ以上無駄な時間を割かせるのは気がひける。

(フェリシア……イザーク様のために、自分から話を切り出すのよ)

愛する人に自ら別れを申し出るのは辛いこと。けれど、私から破談を切り出せばイザーク様はより良い伴侶を迎えられる。イザーク様がお幸せになれるのが、私にとつて一番幸せ。ここは潔く身を引いて、どなたかよきお相手と殿下が結ばれることを祈りましょう。

自分自身にそう言い聞かせながら、私はゆっくりと口を開いた。

「……殿下」

「なんだい？」

「私……殿下との婚約を……破棄させていただきたいのです」

少し言葉に詰まったものの、私はイザーク様に笑顔を見ながら破談を申し入れた。

(やればできるじゃない……そのまま笑顔を保つのよ)

ここで少しでも涙をこぼしてしまえば、イザーク様が気になさってしまう。笑顔を崩さないまま、この場を立ち去らないと。

口元が引きつりそうになるのをこらえていると、イザーク様も口を開いた。

「私の聞き間違いか？ 婚約を破棄すると言ったように聞こえたが……」

「えっ？ い、いえ。その通りに申し上げましたが……？」

「……婚約を破棄したい理由は何だ？」

「えっ？」

理由をたずねられるとは思わず、私は固まってしまった。破談の理由は言うまでもなく、イザーク様が三人のご令嬢たちとの結婚を検討なさっているから。けれどそんなこと、わざわざ私にたずねずとも、イザーク様ご自身が一番よくご存じでいらっしやるはず。

「……それは殿下もよくご存じの理由でございます」

自分の口から他の令嬢についてとやかく言うことがどうも憚られ、遠回しにお伝えしすると、イザーク様が納得したご様子で頷かれた。

「なるほど。やはりあの三人か……」

イザーク様の呟きに、私も小さく頷き返した。

アマールリア公女とリネット嬢、そしてクラリス嬢。どなたも気品があり、心優し

い。きつとイザーク様をしっかりと支えてくださる。ご納得いただけたようなので、早く部屋を出しましょう。

「これでお話も済みましたね。私はもう失礼いたします」

席を立って素早くお辞儀をし、イザーク様に顔が見えないよう俯いたままで踵を返した。もう笑顔を保ち続けるのも限界に近い。私は無作法にも、少し駆けるようにドアに向かった。

これでもう部屋から出られる。イザーク様に泣き顔を見せずにお別れできる。

そう安堵した瞬間、私の体が後ろに強く引っ張られた。もう少してドアノブに届こうとしていた右手が一気にドアから離れる。驚いて振り返ると、イザーク様が私の腕を掴んでいた。

「あの……殿下？」

「私の話はまだ済んでいない」

そうおっしゃったイザーク様のお顔には、怒りの色のはっきりと浮かんでいた。

### III 連れていかれた先は

「あの……殿下？」

呼びかけてもイザーク様は何も返してくだらない。私の腕を掴んで、なぜかベッドの方に向かっておられる。とりあえず腕をひかれるまま、私も小走りで後ろをついていく。

「きゃっ！」

ベッドが目前に迫ったところで、イザーク様が私の腕をひときわ強くひいた。少し走っていた勢いも手伝って、私は滑るようにベッドの上へ。唾然としているうちにベッドがぎしりと軋み、うつ伏せに倒れていた私の視界に大きな影が落ちる。

(イザーク様がこんなに乱暴なことをなさるなんて……)

そもそも、イザーク様が私に対してお怒りになったこと自体が初めてののような気がする。私は一体何をしてしまっただろうか。そうして思い出された、つい先ほどの言葉。イザーク様は「私の話はまだ済んでいない」とおっしゃった。

自分の行動を冷静に振り返ると、ひどいものだった。イザーク様から「帰ってよい」とお返事があつたわけでもないのに、私はただ一方的に「話が終わったので失礼します」と告げてすぐさまに席を立った。その上、小走りで部屋を出ようとしたのだ。まるであなたと話したくないと言わんばかりに。

泣き顔を見せまいと必死になるあまり、王族に対して大変な無礼を。うつ伏せになっていた体を怖々と上に向けると、イザーク様がぞっとするほど冷たい目で私を見下ろしていた。いつも柔らかな水色の目が鋭く吊りあがっている。

慌てて姿勢を正そうとするも、イザーク様の体がのしかかかっていて身動きが取れない。とりあえずそのままの体勢で頭だけぐっと下げる。

「あ、あの……お話が済んでいないのに席を立って申し訳ありませんでした」

イザーク様からお許しの言葉がない。代わりに返ってきたのは、大きな溜息。相当お怒りのご様子だ。

「本当に、申し訳ありません……！ 殿下のお話というのは——」

何をお話になりたかつたのかたずねようと、顔をあげた瞬間。私の目の前でイザーク



様の長いまつげが伏せられていた。唇が重なっている。

とても怒っておられるご様子だったのに、なぜ唐突にキスをされているのか。しかもちゅつと唇が触れるだけではない。

「ふあっ？ んんっ……う……」

唇を深く重ねられ、イザーク様の舌が私の口の中に押し入ってきた。驚きのあまり唇を離そうとするも、きつく抱きしめられていて体が動かない。荒々しく舌を絡められ、ちゅぷちゅぷと唾液が鳴る。

「んむっ……ふっ……うう……」

抗議しようにも、口の端から漏れる声が言葉にならない。私が何か言おうとする度に舌の動きは激しくなるばかりで、舌を絡めとられてはじゅつと音を立てて吸われる。私の口の中にイザーク様の舌が入っているのか、それとも私の舌がイザーク様のお口に入ってしまったているのか。境目がすっかりわからなくなった頃、ようやくイザーク様の唇が離れた。唾液が糸をひき、あごの方までべっとりと濡れているのに、拭う気力もない。恥ずかしさでじわりと涙が浮かんでくる。

「はあ……はあ……あつ、あの……なぜ急に——」

せつかく離してもらえたのに、イザーク様は肩で息をする私をじろりとにらみ、すぐにまた唇を重ねた。これではまったくお話ができない。

長い口づけを何度繰り返したのか。私の頭の中はイザーク様の乱れた息づかいと、唾液が合わさる音ですっかり埋め尽くされている。

次第に朦朧として、ついに私は体を立てていられなくなった。唇が離れた拍子にイザーク様の腕からずりりと抜け、ベッドにぐったりと沈みこむ。ひどく息が苦しい。

そのまま目を伏せて休んでいると、胸と腰が楽になった感覚があり、熱をもっていた体が少し涼しくなった。乱れていた息が整い、薄く目を開ける。最初はぼやけていた視界が、徐々にはっきりと。イザーク様が不服そうなお顔でこちらを眺めていらっしやる。

「……脱がされても顔色すら変わらないか」

「えっ？」

自分の体に目を落とすと、着ていたはずのドレスがない。いつのまにやら脱がされ

ている。

楽になったはずだ。体に残っているのはシュミーズと下穿き、太腿までのソックス。よくよく見ると、コルセットだけでなく胸に着けていた下着も抜き取られ、白いシュミーズから薄っすらと乳輪の色が透けてしまっている。

「あつ……見ないでください！」

イザーク様にくるりと背を向け、這うようにしてベッドの上を逃げる。こんな恥ずかしい格好を見られてはいけないのに、ドレスが見当たらない。何か体を隠せるものと、目についた枕を手にとって胸の前で抱きかかえた。足をぎゅっと縮めてうずくまっていると、後ろからぎしり、ぎしりと音が近づいてくる。

「それで隠しているつもりか？ いや、誘っているのか」

イザーク様に太ももを撫でられ、背筋がぞくりとした。もしかするとこの体勢、胸はしっかり隠れているけれど、イザーク様からはお尻を突きだしているように見えるかもしれない。しかもシュミーズの裾から、下穿きが見えてしまっているかも？

そう思った時にはもう、下穿きの腰ひもを片方解かれていた。秘められた部分が外

気に触れ、体がびくんと震える。

「あっ……やめ——」

「今さら恥ずかしがって見せても遅い」

イザーク様の手が容赦なく反対側の腰ひもを解き、下穿きが落ちる音がかすかに聞こえた。恥ずかしい場所をできるだけ見られないよう、ぴったりと足を閉じるくらいしか私にできることはない。

「ふっ……いい眺めだな」

やけに楽しそうなイザーク様のお声が聞こえて、腰からお尻にかけてさらりと撫でられた。布を一枚隔てている感覚。少なくともお尻が丸見えになっていることはなさそうだとほっとしたのも束の間、私の背中にイザーク様の体がつっしりと預けられた。イザーク様の胸板とベッドに挟まれ、ぴくりとも動けない。耳にイザーク様の吐息があたる。

「言え。どいつが君をこうも淫らにした？」

「えっ？ あの……えっ？」

イザーク様の急な質問にとまどいを隠せず、うまくお返事ができない。

なにせ私は今、自分の体を隠すのに忙しい。ただ、「誰がこんな淫らかな格好にしたのか」という意味のご質問なら、それはもう「イザーク様がなさったのです」としか答えようがない。

イザーク様が私のドレスを脱がせた上に胸の下着まで抜き取ったから、このような恥ずかしい状況になっているわけで。むしろ私をこんな格好にさせて上からのしかかっっておられるイザーク様に「このように淫らなふるまいを誰があなたに吹きこんだのですか」とおたずねしたいような？

「……言わないならいい。体にたずねる」

耳元でぼそりと聞こえたイザーク様のお声はいつもより低く、冷たい響きを帯びていた。

#### IV 気分転換になるなら

イザーク様の独り言に、私の頭から血の気がひいていく。

「体にたずねる」というのは、尋問をあらわす言葉。口を割らない者を縄で縛り、鞭で打って喋らせる。この場に鞭も縄もないだろうと思うと、このまま素手で打たれるのかしら。けれど、そんなことをされても私からお話することは特にない。ただただイザーク様の手が痛くなるだけで終わるような？

「さて、誰だったか。確か三人いたな」

お尻でも打たれるのかと警戒していたのに、イザーク様の手は私の胸に。シュミーズの上から、やわやわと揉みしだかれている。とても恥ずかしいけれど、痛みはない。むしろマッサージのように気持ちよく、ちゃんと尋問になっているのか心配になるほどだ。

「ああ、思い出した。まずはレジエス伯爵の息子だ。あいつか？」

「えっと……申し訳ありません、意味がよく……あっ♡」

優しく揉まれていた胸の先端を急に指でつままれ、私の口から聞いたこともない声が出た。自分で聞いても恥ずかしくなるようなはしたない声だったのに、イザーク様はお気に召したようで、私の乳首をこりこりと執拗に弄っておられる。

「いい声だ。これは効果がありそうだな」

「なっ……あっ♡ やっ、やめ」

「正直に答えるならすぐに止めてやる。奴が違うというなら、サデラ子爵家の令息かな？」

すぐにでもやめていただきたいけれど、どうお答えすればいいのかわからない。本当に先ほどから、イザーク様が何について話しておられるのか、まったく身に覚えがないのだ。

私は何も喋らないせいで、楽しそうになさっていたイザーク様のお声に苛立ちが混じりはじめた。

「強情だな。まあその二人が外れなら、残るはランヘル伯爵家の長男だ」

「あう……あっ♡ あの、エリックが何を……？」

「奴を名前で呼んでいるのか？」

怒りをぶつけるかのように、イザーク様が私の乳首にかりつと爪を立てた。軽い痛み  
の後に、じわりと快感が広がる。

「ひあっ♡ し、したいので……!!」

「そうか。たったひと月で私より親しくなったと」

「い、いいえ？ むかし、から……あう♡」

「昔から？ 道理で息の合った様子で踊っていたわけだ」

「……あっ」

イザーク様の言葉で、私はようやく何についてお話になっているのか理解した。

最後に参加した舞踏会。イザーク様が途中で帰ってしまい、私が一人で見  
かねた幼馴染のエリックが、気分転換に一曲どうかとダンスに誘ってくれたのだ。お  
帰りになったかと思っていたけれど、私がエリックと踊っているのをどこかでご覧に  
なっていたのね。

「さあ白状してもらおうか。あの男と何度したのか」



イザーク様は指の腹で私の乳首を押しつぶしながらも、耳に舌を這わせておられる。休む間もなく続く責めに、私はたまらず首をのけぞらせた。

「あっ、あの一度だけです！ 殿下がお帰りになった後、気分転換にどうかと誘われて……」

「気分転換だと!? よくもそんな誘いに乗ったものだな？」

「ひっ！」

耳元で放たれた怒声に身をすくめると、イザーク様の指がぴたりと止まった。

「……まあいい。そういうことなら私も楽しませてもらうんじゃないか。こんなに気分が悪いのは生まれて初めてなんだ」

(そこまで……!?)

私が入り込んで踊ったのがそんなにお気に障ったのかしら。でも、これから婚約破棄する相手が誰と踊ったかなんて、気に留める必要はないはず。

じっくりと考える暇もなく、私の体はぐるりと仰向けに。まだ昼下がりに。外からの日差しが眩しいほどベッドの上に降り注いで、私は思わず目を閉じた。薄っすらと目

を開けてみると、イザーク様が私の上にまたがり、シュミーズの肩ひもをに手を伸ばしていらっしやる。

(まさか……これも脱がせるおつもりなの?)

胸につけていた下着も下穿きも脱がされて、このシュミーズまで奪われたら、私の体を隠してくれるのはソックスだけになってしまうのに? こんなに明るい中で、ほとんど裸にするというの?

「まっ、待ってください!」

肩ひもをずり下げようとすするイザーク様の手をとっさに掴んだら、無言でにらみつけられた。何か言われずとも、私が委縮するには十分だ。

「……なんでもありません」

「ようやく償う気になったようだな」

償うって、エリックと踊った件かしら。

確かにイザーク様という婚約者がありながら、他の殿方と踊るのは正直気が引けた。けれど、法で禁じられていることでもなければ、イザーク様ご本人から駄目だと

言われたこともなかった。私はただ、「エリックのことをイザーク様だと思って一曲だけ楽しませてもらおう」と。そんな気持ちで一緒に踊っただけだったのに……

涙で視界がぼやけても、シュミーズを引き下げられて両胸が露わになったことだけはしっかりとわかった。とても見ていられなくなり両手で顔を覆うと、頬がひどく熱い。恥ずかしさでさぞ真っ赤になっているに違いない。

シュミーズ越しに触られていた胸に、イザーク様の手がじかに触れる。両手で包み込むようにゆっくりと揉まれると、先ほどと違って少しくすぐったい。イザーク様の手はいつもひんやりしていて気持ちいいのに、今は手のひらがとても熱いように感じられる。感触を味わうように揉まれた後、指先で敏感な先端を責められはじめた。

「ひっ……あっ♡」

顔を覆っているせいで、次に何をされるのか分からない。そのせいで余計と体が反応してしまふ。指の腹で円を描くようになってくると弄られたり、かと思えば二本の指で挟んでこりこりと擦られたり。何がそんなに楽しいのかと思うほど執拗に責められ、どれだけ口を固く結んでも情けない声が漏れてしまふ。

そのうち、指とはまったく違うじつとりと湿った感覚を覚えて、思わず顔を覆っていた両手を取り払った。イザーク様が私の乳首に舌を這わせておられる。

「あっ♡ あの……そのようなことが、気分転換に？」

イザーク様は少しだけ口を離し、私の問いかけに短く答えてくださった。

「ああ。とても気分が良くなる」

「さよう……ですか」

イザーク様がそうおっしゃるならもう、私は黙って受け入れるしかない。私のせいでご不快な思いをさせてしまったのだから。それにしても本当に楽しそう。こんなに楽しそうに何かをなさっているイザーク様を見たのは、もうずいぶんと前のことだわ。

先ほどまで恥ずかしさでも見ていられなかったのに、イザーク様のお顔に集中すると何のことはない。むしろ、次に何をされるのかわかる分、安心感があると言える。イザーク様の頬は少し上気して、私に見られているのも構わず夢中で乳首を舐めしゃぶっておられる。片方の乳首を口の中に含まれ、強く吸われる。もう片方の乳首

も余った手で休みなく弄られ、私はたまらず体をよじった。

「ひゃう♡ もう、駄目です……！」

「こら。逃げるな」

「は、はい……」

イザーク様に叱られて冷静になったのも束の間。ここまで延々といじめぬかれたかなのか、私は体に異変を感じた。体の奥が熱く、その熱がどんどん溜まっていくような。初めての感覚に恐怖を感じていると、イザーク様の口が私の胸から離れた。

「フェリシア……」

「んむっ」

ふいに深く口づけられ、体の奥がずくりと疼く。舌をぴちゃぴちゃと絡められると、私の体がイザーク様の下でびくと跳ねた。最初にキスされた時よりも明らかに快感が増している。口の中に与えられる刺激で体が跳ねる度に、ぴんと立った乳首がイザーク様の上着に擦れ、体が弓なりになるほど大きく反応した。

「はあ……なんて淫らな体だ。もうここに欲しいのか？」

「あっ……っ♡」

唇を一旦離すと、イザーク様は私の秘部を擦るようにご自分の腰を強く押しつけた。布越しでもはつきりわかるほど熱く、そして硬く昂っている。再び唇が重なる。

イザーク様は私の口を舌で蹂躪しながらも、片手でご自分の上着をくつろげ、下では繰り返しぐっぐつと腰を押しつけておられる。気づけば私は無意識のうちに、イザーク様の腰に足を絡ませ、自分の方に引き寄せていた。

(……はっ。私ったら、なんて淫らなことを！)

急いで足を解いたけれど、さすがにイザーク様も苦笑している。

「ふっ……まだ何もしていないうちからこの有様とは」

あら。私としては次々と破廉恥なことをされていると思っていたのに、イザーク様からすればまだ何もしていない段階だったなんて。けれど、先ほどと比べればイザーク様のご機嫌が見違えるほど良くなった。気分転換をなさりたいようだったし、お仕事もある。そろそろ私は用済みかしら。

そう思って、軽い気持ちでたずねたのが間違いだった。

「殿下。もうよろしければ、そろそろ失礼いたしますが……？」

「……何だと？」

イザーク様の眉間に、深々と皺が刻まれた。

## V ほんの戯れ

「た、大変申し訳ありません。もう気分が良くなられたようにお見受けしたので、そろそろ私はお邪魔かと思つた次第で……」

両手で胸を隠しながら慌てて謝罪するも、イザーク様の眉間の皺は一層深くなるばかり。つい先ほどまでは楽し気に細められていた水色の瞳にも、はっきりと嫌悪感が見て取れる。

「反省が足りないようだな。この期に及んで逃げようとするとは」

「い、いえ！ 逃げようだなんて」

弁解しようとする私に目もくれず、イザーク様は私の太腿を抱えて左右にぐいと開かせた。

（なっ……何も穿いてないのに！）

私はとっさにシュミーズの裾を掴み、足の間までぐつとのばした。すんでのところまで隠せてほっとするも、イザーク様は見るからにご立腹。奥歯をぎりりと噛みしめる



音が私の耳にまで聞こえるほどだ。

「隠していいと言ったか？」

「……………いいえ」

「それなら、なぜ手をどけない？」

「ど、どうかお許し——」

「裾を捲れ」

イザーク様の有無を言わさない迫力に「はい」と返事することすらできず、私は黙ってシュミーズの裾を捲った。秘められた場所がイザーク様のすぐ目の前にさらされ、もう消えてしまいたいほど恥ずかしい。蜜で濡れた私の花芯を鑑賞するように、イザーク様はじっくりと眺めておられる。

「たったあれだけでこんなに濡れて……」

私に聞こえるか聞こえないか。本当に小さなお声でぼそりとおっしゃったのに、イザーク様の吐息がかかって花唇がひくりと震えた。

「ああ、たまらないな。とても美味しそうだ」

そうおっしやったかと思うと、イザーク様は私の花芯に唇を寄せた。

(わっ、私……本当にまだ何もされてなかったのね!?)

今ならわかる。あんなに色々とされたのに、なぜイザーク様が「何もしていない」などとおっしやったのか。こんなことをなさるおつもりなら、先ほどまでの行為はほんの戯れ。序の口も序の口だったのだ。ちゅっと口づけられた後、じゆるじゆると音を立てて蜜をすすられ、頭が沸騰したように熱くなる。

「やっ♡ ああん♡ 吸うの、駄目ですっ……!!」

イザーク様は顔をうずめるようにして蜜を味わっておられる。足を閉じたいのに、イザーク様が足の間におられるので閉じるのにも限界がある。そのうち、外にあふれ出ていた蜜が終わってしまったのか、私の中に舌が押し入ってきて、くちゅくちゅとかき回すように蜜を舐めとり始めた。

「ひゅっ♡ もう止め……」

イザーク様の頭に手を伸ばしかけて、すぐに引っ込めた。いくら止めてほしいからといって、頭を押しつけるなんて許されるはずがない。ただでさえ先ほど、隠しただ

けでひどく怒られてしまったのに。

(……耐えましよう。イザーク様にご満足いただけるまで)

私はできるだけ閉じようと努めていた足を自ら開いた。どうぞお好きにしてくださいという態度に少し機嫌がよくなったのか、顔をあげたイザーク様の口元に笑みが浮かんでいる。

「いい子だ。力を抜いているようにな」

「は、はい……あっ」

力を抜くように言われたのに、イザーク様の指が花芯につぶつと浅く入った瞬間、私は思わず体を固くした。舌とはまったく違う硬い感触に、どうしても恐怖を覚えてしまう。

「フェリシア？ 力を抜けと言ったはずだが」

「も、申し訳ありません……！」

反射的に謝るも、どうやって力を抜けばいいのかまるでわからない。そのうち、イザーク様が体を起こして私の乳首を口に含んだ。

「あっ♡ ああ……んっ♡」

つい先ほどまで執拗に弄られて敏感になっていた乳首をぢゅっと吸われた途端、足から力が抜けてイザーク様の指が半分ほど埋まった。

「ひあっ♡ まっ、待って……あっ♡」

侵入した指は、入り口をほぐすようにゆっくりと円を描いている。時折、くちゅくちゅと小さな音が鳴り、その度に指が少しづつ飲み込まれていく。

「あっ♡ だ、だめ……!」

ついにはイザーク様の中指が深々と沈みこみ、奥のほうをぐちゅぐちゅとかき回される。止めてほしいような、もっと奥まで届いてほしいような。よどみなく指を動かしている間も、イザーク様の口は休むことなく乳首を責めたてている。吸われながら先端を舌先で転がされると、どうしようもなく体の奥が熱くなる。努めて開こうと意識していた足からはもう完全に力が抜け、ただだらしなく開いてしまっている。

「ああ、とてもいい子だ」

「ひうっ……!」

一瞬、私の中から指が出ていったと思ったら、今度は人差し指と中指が一緒に入ってきた。

「んっ……あう……」

指を一本足されただけで、ものすごい圧迫感。私はまた体を固めてしまい、そのせいで指が押し戻されてしまう。イザーク様は私の胸から口を離し、何やら考えこんでいらっしやる。

「ふむ……ここかな？」

花唇の少し上、芽のようにつんと立っている部分を軽くつつかれた瞬間、びりっとした快感が走って私の腰が大きく跳ねた。

「ひあっ♡!? あっ♡ そこ、いやですっ♡」

「ああ、間違いない。ここがクリトリスか」

「ああ♡ やっ、やだ♡」

「嫌なのか？ とても悦んでいるように見えるが」

「ひゃうっ♡」

指を増やされて苦しく感じていたのに、花芽と一緒に弄られると快感ばかりに意識が向く。あつという間に奥から蜜があふれてきて、じゅぷじゅぷと大きな水音がたち始めた。

指を揃えたまま円を描くようにかき回されたり、指の間を開くように中をぐつと押し広げられたり、滑りの良くなつた花襲を指で擦られながら、花芽もずっと指で責められている。外にあふれた蜜をたっぷりと塗られ、指の腹でこりこりと弄られると、太腿が勝手にビクビクと震える。

「すごいな。こんなに乱れるのか」

「ひうう♡ もっ、もうやめ……あぁっ♡」

花芽を軽くつままれ、被っていた皮をきゅつと剥かれると、そこは弾けそうなほどぷつくりと赤く充血していた。

「ああ。ここも美味しそうだ」

無防備になってしまった花芽を、今度はイザーク様の舌でなぶられる。指よりもはるかにやわらかく、ぬるりとした感触。それが敏感な部分にちょうど合っているの

か、先ほどよりもさらに感じてしまう。

一定の間隔でととと♡、と繰り返して舌でつつかれ、快感が一気に積みあがっていく。意識が飛んでいきそうな感覚にたまらず逃げようとするも、片方の足を掴んで引き戻され、身をよじってもイザーク様の舌と指がついてくる。逃げられない……♡

「あっ♡ お願いっ、お願いします♡ それ、やめっ♡♡」

私が懇願しても、イザーク様の方からはくくつと笑い声が聞こえてくるだけで、ちつともやめてくださらない。絶えず与えられる快感に目の前が白みだして、体の奥から何かがせり上げてくる。

「ひゃう♡ あああ♡ こ、こわいっ♡ おかしくなっちゃう……!!」

ぐずぐずに蕩けた花芯はイザーク様の指をすっかり受け入れ、体の内側から花芽の裏側あたりをトントンと突かれています。体の外ではイザーク様がちゅつと花芽を吸い、唇で扱きはじめた。内と外からの執拗な責めに、ちゆるちゆる、じゅぽっ♡じゅぽっ♡と水音が淫猥な響きを増す。

「ひあっ♡ も、もうだめっ……くる♡ きちやう♡」

自分でもう何を言っているのかわからないけれど、本当に未知の感覚がすぐそこまでやって来て、泣き叫ぶように嬌声をあげてしまう。それでもイザーク様は中を突く指をまったく緩めてくれず、私を追いたてるように花芽をじゅうう♡と強く吸った。その瞬間、体の奥からせり上がっていたものが唐突に弾けた。

「くあっ♡!? ひいいいっ♡♡」

息がひゅっと詰まって、足の先がシーツにぎゅっと食い込む。内腿がガクガクと震え、私の花芯から愛液がびしゃっと噴き出した。反り固まっていた体からぐったりと力が抜ける。内腿には痙攣がびくびくと残り、頭がひどくぼうつとする。しきりに息を吸おうとしてか、胸が忙しく上下するのをどうにも止められない。

「はぁ……はぁ……♡」

「ふふっ……本当に素直な体だ」

体を起こしたイザーク様は、胸で息をする私を楽しそうに眺めながら、指にまとわりついた蜜を舐めとっていらっしやる。一体どれだけの愛液を噴き出したのか、イザーク様がお召しになっている上着の襟がびっしりと濡れている。



「……あぁっ！ 申し訳ありません！」

体を起こそうとする私を、イザーク様が楽しそうにベッドに押しつける。

「いい。今度は私が君を汚す番だからな」

イザーク様が濡れてしまった上着をシャツごと大胆に脱ぎ捨てると、均整のとれた上半身が露わになった。

それだけでも目のやり場に困るというのに、イザーク様がトラウザーズの前をくつろげ、下穿きを少し引き下げた途端、私の口から悲鳴めいた声が飛び出した。

「ひいッ!？」

イザーク様の足の間で、禍々しいものが屹立している。殿方の秘められた場所なんて、普段の私ならすぐに顔を覆うところなのに、あまりに恐ろしかったせいなのか、目を見開いたまま固まってしまった。

「……何をそんなに驚くことがある？」

(落ち着いていられると思います!?)

だってそんなところ、旦那様になるお方のものしか見ないでしょう。

傘のように張り出した先端。太く長い茎の表面には、どくどくと脈打っているの  
わかるほど血管が浮きでている。見るからに凶悪なそれは、人の体から独立した別の  
生き物のよう。息をのんでいる私に、イザーク様がにやりと笑った。

「ああ、わかった。私の方が大きいから驚いたのか？」

「えっ!? い、いいえ！」

「……では小さくて驚いたのか？」

「違います！ 比べる対象を見たことがなくて！」

首を大きく横に振って否定する私に、イザーク様は呆れたお顔で溜息をついていら  
つしやる。

「はあ。この期に及んでまだ見え透いた嘘をつけるのだな」

「嘘じゃありません！」

真剣に否定してみても、残念ながら取り合っていただけなかった。

「……まあいい。すぐにわかる」

「あっ♡」

イザーク様は私の太腿を抱え、淫茎に蜜を絡めるようにぬりゆぬりゆと擦りつけておられる。てらてらと濡れたことでおぞましさが増し、その先端がくぷりと私の花芯に沈んでいく。

「ひあっ♡」

「ほら。もう先が入ってしまった」

「っあ♡ ああっ♡」

ちゅぽっ♡ちゅぽっ♡と先端だけを出し入れされる。浅いところを繰り返し突かれ、次第にちゅぽっ♡ちゅぽっ♡と水音が淫らになっていく。

「フェリシア？ 嘘でないならなぜこんなに蜜があふれてくる？」

「だっ、駄目♡ 本当に、無理ですっ！」

確かに先端は入っているけれど、そんなに長いものが入るわけがない。

初めて繋がる時は痛いものだとお母様から教わった時に「怖いなあ」と思ったけれど、痛くて当然だわ。だってこんな、指と比較にならないほど太くて長いものをねじ込まれたら……きつと死んでしまう！

いやいやと首を横に振る私を見て、イザーク様はまたしても眉間に皺を寄せておられる。

「そうか。あいつはよくて私は無理だと」

（あいつ？ それはどちら様で……？）

たずね返す暇をまったく与えていただけず、イザーク様は私の体を一気に貫いた。

（サンプル版 おわり）